第10課　預言と聖書

【暗唱聖句】

「こうして、わたしたちには、預言の言葉はいっそう確かなものとなっています。夜が明け、明けの明星があなたがたの心の中に昇るときまで、暗い所に輝くともし火として、どうかこの預言の言葉に留意していてください」第二ペテロ1:19

【今週のテーマ】

ペテロは確信をもってこの手紙を書いていますが、それはイエス様の栄光を目撃したこと、またみ言葉によって確信がさらに裏付けされたことによります。わたしたちも主の栄光を仰ぎ見、み言葉によって確信を得ることが大切です。

【日曜日　旧約聖書におけるイエス】

「この救いについては、あなたがたに与えられる恵みのことをあらかじめ語った預言者たちも、探求し、注意深く調べました。預言者たちは、自分たちの内におられるキリストの霊が、キリストの苦難とそれに続く栄光についてあらかじめ証しされた際、それがだれを、あるいは、どの時期を指すのか調べたのです。彼らは、それらのことが、自分たちのためではなく、あなたがたのためであるとの啓示を受けました。それらのことは、天から遣わされた聖霊に導かれて福音をあなたがたに告げ知らせた人たちが、今、あなたがたに告げ知らせており、天使たちも見て確かめたいと願っているものなのです」第一ペテロ1:10～12

ペテロは自分が何について語っているのかよくわかっていました。それは自分が語っている方のことをよく知っていたからです。ペテロが確信をもってイエス様のことを語ることができた理由の一つは、旧約の預言者たちが指し示していた救い主がイエス様だったのだとわかったからです。だから同様に、わたしたちも聖書の中に記された方、イエス・キリストについて知ることが大切です。そうするなら、さらに確信を得て喜びに満ちた人生を歩むことができるでしょう。

さて、ペテロは読者の目をイエス・キリストに向けさせます。ペテロはここで聖霊が明らかにして下さった2つの重要な真理に注目しています。それは「キリストの苦難」と「それに続く栄光」です。この二つのことは旧約の預言者たちは繰り返し語っていました。

・キリストの苦難

「わたしはダビデの家とエルサレムの住民に、憐れみと祈りの霊を注ぐ。彼らは、彼ら自らが刺し貫いた者であるわたしを見つめ、独り子を失ったように嘆き、初子の死を悲しむように悲しむ」ゼカリヤ12:10

「剣よ、起きよ、わたしの羊飼いに立ち向かえ、わたしの同僚であった男に立ち向かえと、万軍の主は言われる。羊飼いを撃て、羊の群れは散らされるがよい。わたしは、また手を返して小さいものを撃つ」ゼカリヤ13:7

・それに続く栄光

「見よ、わたしが、イスラエルの家とユダの家に恵みの約束を果たす日が来る、と主は言われる。その日、その時、わたしはダビデのために正義の若枝を生え出でさせる。彼は公平と正義をもってこの国を治める」エレミヤ33:14、15

これらの預言の言葉は当時の人々を前に語られましたが、当時それが成就することはなく、それはイエス・キリストが到来するまで待たなければなりませんでした。これらのキリストに対する預言の言葉は、預言者自身が日夜いつ成就するのかを確かめたいと調べていただけでなく、「天使たちも見て確かめたいと願っている」ほどのものでした。それをいま、ペテロの手紙を手にしているクリスチャンたちはまさに見ているとペテロは語るのです。迫害や多くの困難の中にあってどれほどこのペテロの手紙は彼らを励ましたことでしょう。

【月曜日　威光に目撃者たち】

「わたしたちの主イエス・キリストの力に満ちた来臨を知らせるのに、わたしたちは巧みな作り話を用いたわけではありません。わたしたちは、キリストの威光を目撃したのです。荘厳な栄光の中から、「これはわたしの愛する子。わたしの心に適う者」というような声があって、主イエスは父である神から誉れと栄光をお受けになりました。わたしたちは、聖なる山にイエスといたとき、天から響いてきたこの声を聞いたのです」第二ペテロ1:16~18

ペテロは自分が書いていることは、巧みな作り話ではなく、実際に目撃したことに基づいていると言います。それだけに確信をもって語っているわけです。ペテロはイエス様の人生と働きにおける数々の重要な出来事に立ち会っています。そもそも網を置いてイエス様に従うきっかけともなったのは、一晩中漁をしていても全く魚がとれなかったのにイエス様の言葉通りにもう一度網を下したら、大量の魚が網にかかった奇跡を通してでした。ペテロはこの出来事に驚き、イエス様にひれ伏したのでした。すると、「あなたを人間をとる漁師にしよう」との召しを受けたのです。ペテロはもはや従わないわけにはいきませんでした。それくらい強烈な体験でしたし、主の招きが嬉しかったのではないでしょうか。

　そして数々のイエス様との出来事の中でも特にペテロにとって強烈な印象を与えたのは、イエス様の変貌の山での出来事だったようです。第二ペテロ1：17，18でそのことが語られていることからも、いかにペテロにとって忘れがたい強烈な経験だったかがわかります。祈るためにイエス様に導かれてヤコブとヨハネと共に山に登ると、そこで突如イエス様のお姿が真っ白に光り輝き始めたのです。それだけでなく、天国に上げられたとされる旧約時代の預言者モーセとエリアがそこに現れ、天からは「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者」という神様の声が轟きわたったのでした。

　この出来事の少し前に、イエス様は「確かに言っておく。ここに一緒にいる人々の中には、神の国を見るまでは決して死なない者がいる」（ルカ9：27）と言われました。このイエス様の言葉は、この変貌の山での出来事を指していたのでしょう。まさに、そこは神の国だったからです。ペテロは何を言っていいのかわからず「先生、わたしたちがここにいるのは素晴らしいことです。仮小屋を三つ建てましょう…」と言います。きっと、あまりにも素晴らしかったので、ここにずっといたかったのでこう言ったのかもしれません。

しかし、天から響く声は「これは私の子、選ばれた者、これに聞け」でありました。天国の雰囲気にいつまでもいたいというのは当然です。しかし、この世に生きるわたしたちにとって、いま第一にすべきことはイエス様の声に聞き従うこと、聖書のみ言葉に聞き従うことだと神様は言われたのでした。天国はやがて行くことができます。そのときはわたしたちはいつまでもずっと神の国にいることができます。また、ペテロは天から「これは私の子、選ばれた者、これに聞け」と轟く父なる神様の御声を聞いて、イエス様と父なる神様が特別な関係にあることがわかりました。この一連の出来事はペテロにとって、忘れがたく、ある種信仰のターニングポイントになったのでした。　わたしたちもイエス様との体験を忘れずに大切にしたいものです。そして、その体験を通して神様は生きておられることを証するものでありたいものです。

【火曜日　心の中の明けの明星】

「こうしてわたしたちには預言の言葉はいっそう確かなものになっています。夜が明け、明けの明星があなたがたの心の中に昇るときまで暗いところに輝くともし火として、どうかこの預言の言葉に留意していてください」第二ペテロ1：19

ペテロは他の多くの聖書の中に見られるように、光と闇とを区別しています。「夜が明け」「明けの明星」「暗いところ」「ともし火」など、光と闇を象徴する言葉を並べ、わたしたちは二つの世界のはざまで生きていることを意識させます。「暗いところ」とは、この世の世界であり、そこはむさ苦しく汚れた世界です。そのような暗い世界にあって聖書のみ言葉はともし火のごとくに輝いているとペテロは語ります。このみ言葉に目を向けていくなら、やがて「夜は開け、明けの明星が心の中に昇る」ような素晴らしい経験へと導かれていきます。ここで言う「明けの明星」とはイエス・キリストのことを表しています。つまり、心の中に希望の源であるわたしたちの救い主イエス・キリストが生き生きと輝いて下さる経験に至るということです。この経験は光と闇が現実であるように、わたしたちにとって現実的な経験となります。それは信仰者が経験する特権であり、救いの喜びです。

また、このようなイエス様との個人的な経験をわたしたちは持たなければならないということでもあります。イエス様が遠いところにおられるのではなく、心の中に希望の光として輝きだす個人的な関係こそ大切なのです。そして、それは日々み言葉を暗い世界に輝くともし火として大切にし、またそのともし火に照らし出されながら生きていくならば、必ず現実のものとなります。また、明けの明星であるイエス様の光が心の中に輝きだした人は、まだこの光を知らない人に光で照らしてあげる働きが期待されています。そのためにわたしたちは存在しているとさえいえます。

【水曜日　一層確かな預言の言葉】

「何よりもまず心得てほしいのは、聖書の預言は何一つ、自分勝手に解釈すべきではないということです。なぜなら、預言は、決して人間の意志に基づいて語られたのではなく、人々が聖霊に導かれて神からの言葉を語ったものだからです」1:20～21

ペテロが巧みな作り話はしないと言っているのは、実際に語っている事柄（イエス様の救い）を目撃したからということと、そして聖書の預言によってそれが裏付けされているからということの2点を挙げています。またペテロは預言に関して、「聖書の預言は何一つ、自分勝手に解釈すべきではない」と語っています。その理由は、預言は、人間の意志ではなく聖霊に導かれた神様の言葉だからです。

自分勝手な解釈を行うような偽預言者や偽教師が教会の中に現れようとしていました。これは教会の共同体にとって大いなる脅威となるものでした。み言葉は教会の原理原則であり、一致のための土台です。しかし、そのみ言葉の解釈が崩れ出せば、教会は土台から崩壊していくことでしょう。

【木曜日　生活の中におけるみ言葉】

ペテロはいかに聖書のみ言葉が大切であるかを語っていますが、パウロも同様にみ言葉の大切さについて次にように語っています。

「また、自分が幼い日から聖書に親しんできたことをも知っているからです。この書物は、キリスト・イエスへの信仰を通して救いに導く知恵を、あなたに与えることができます。聖書はすべて神の霊の導きの下に書かれ、人を教え、戒め、誤りを正し、義に導く訓練をするうえに有益です。」第二テモテ3:15、16

パウロは聖書はイエス・キリストの信仰を通しての救いに導く知恵が書かれてあり、人を教え、戒め、誤りを正し、義に導く訓練をするうえに有益であると語ります。ゆえに、教会はこの聖書の御言葉を元に教理が定められ、個人の生活においてもやはりこの聖書のみ言葉が生きる指針となり、最終的にイエス様を通して与えられる救いへと至るための書物となります。